「富木殿御返事」講義

文永九年四月　五十一歳御作

於　佐渡一ノ谷

（御書全集　九六二ページ
編年体御書四七七ページ）

この御書は、富木常忍が佐渡の国の日蓮大聖人よりたまわったお手紙です。

日蓮大聖人は、法華経の勧持品の「数数見擯出」の予言どおりに、二度島流しにあわれた。すなわち、釈尊の予言をそのまま日蓮大聖人の御身にあてはめて、伊東の流難、佐渡の流難となったのです。その佐渡の流難のときに、弟子である富木常忍にあてられた激励のお手紙が、この御書なのです。

日蓮が臨終一分も疑無く頭を刎ねらるる時は殊に喜悦有るべし、大賊に値うて大毒を宝珠に易ゆと思う可きか

この御文は、死身弘法の大精神をお示しになっておられます。

日蓮大聖人が佐渡へ流された。邪宗の輩の手によって、自分はいつ殺されるかしれない。しかし、妙法流布のために、まちがいなく首をはねられるというそのときこそ、これ以上の喜悦はないだろう、とおおせなのです。

私どもの師匠は日蓮大聖人です。日蓮大聖人のお振る舞いを鑑とし、手本として仏道修行し、日蓮大聖人からおほめのことばをいただけるような、信心を貫いている人が、ほんとうの日蓮大聖人の弟子といえるのです。

私どもも弟子の一分として、日蓮大聖人の仏法を弘めていくうえにおいて、どんな迫害があっても、むしろ迫害があればあるほど「喜悦有るべし」、これほどの喜びはないと、莞爾としていきれる、また修行しきっていける一人ひとりでなければならないのです。そういう境涯になっていける人は、まことの日蓮大聖人の弟子といえるのです。

日蓮大聖人は、「此経難持の事」という御書（四条金吾殿御返事）を残されております。この経はたもちがたし、御本尊を持てばかならず難にあう、とおおせです。

それなのに、少々悪口雑言されたからといって、すぐに「信心やめようかな」と思う。そういう弱い信心では成仏できるわけはないし、まして日蓮大聖人の弟子とはいいがたい。したがって、信心が浅いために、大功徳も受けられないのです。

信心していけば難があるのです。たとえば、自動車の運転の練習をするにしても、一人前の運転手

になるまでには、ドブへ落ちたり、電柱にぶつかりそうになったり、ハラハラするような場面に何回もあいながら、だんだんと力をつけて、自由自在に運転ができるようになるのでしょう。

運転なんか習わないと決めれば、難がないかもしれません。苦労はないわけです。と同じように「永遠の幸福をつかみきるのだ、絶対の安心立命、物心両面にわたる幸福な生活をきずこう」という場合には、御本尊を拝み、御本尊を根本とした信心修行をしていく。そうすれば罪業はでるし、また宿命転換のために難もあり、罪障消滅が必要だということになります。

それを「信心すると難があるのなら、それでは信心しないでおこう」などというのは、もっとものようにきこえますが、そうではないのです。信心してからうける難は、かならず変毒為薬されるのです。また、同じ罪業であっても、それでも軽くうけているのであり、すべて帳消しにしていけるのです。

それなのに、信心しないで、なんとかして罪業を消滅しようとか、悪口をいわれないように、難がないようにしていこうなどといったところで、どこまでいっても永久に不幸です。

ですから、御本尊を持った以上は、一生涯、勇敢に信心だけはしぬいていきましょう。いっさいが自分自身のためなのですから。日蓮大聖人の弟子として、もし、大難があって妙法流布のために命をおとすようなことがあったとしても、その瞬間に、「ああ、よかった」と、にっこりと笑っていけるような境涯になりたいものです。

「大賊に値うて大毒を宝珠に易ゆと思う可きか」というのはそこなのです。

これは、変毒為薬を明らかにした御文です。

法難にあうということは、ちょうど大賊にあって、もっていた大毒を奪われ、かえって宝珠をえたようなものだというのです。ということは、自分自身の罪業というものを、ぜんぶ大賊がもっていってくれるようなものであり、仏の境界だけ残るというのです。すなわち成仏疑いないというのです。これ変毒為薬です。

ですから日蓮大聖人は「種種御振舞御書」に「此の身を法華経にかうるは石に金(こがね)をかへ糞(くそ)に米をかうるなり」(御書全集九一〇ページ)とおっしゃっております。

すなわち、石を金にかえると思いなさい、しょせん糞のような生命ではないか、と。福運のない、罪業深いわれわれではないか、と。それゆえ御本尊のために生命を捨てることは、ちょうど金にかわっていくようなものである。その原理と同じなのです。

実際問題として、私などもノリ屋のむすこです。病弱で世間から見放されていくような運命の自分であったのが、御本尊にお目にかかり、また日蓮大聖人の仏法を教わり、創価学会員として今日まできたがゆえに、仏法も少しずつわかり、福運も積み、大勢の人々に信頼され、大勢の人々のために働いていけるなどということは、それこそ大毒を宝珠にかえたようなものでしょう。

皆さん方一人ひとりが、そうだと思います。自分自身というものを静かにふり返ってみた場合に、どれほどこの御本尊に巡りあったことによって救われていることか。これ以上の有意義な最高の幸せはないと、しみじみと感ずるはずだと、私は思うのです。

そのように感じていくことも、信心といえるのではないでしょうか。

> 鶴目員数の如く給び候い畢んぬ御志申し送り難く候

富木常忍のお使いの方が、きっと佐渡の一の谷まで日蓮大聖人をおたずねして、御供養にあがったわけでしょう。

戸田第二代会長は「今だから佐渡といっても近いけれども、七百年前の佐渡といえば、それこそ現在でいえば、アフリカの砂漠の真ん中のようなものだよ」といわれたことがありましたが、実際、そうでしょう。

汽車もなければ、飛行機もなければ、船だって今みたいに大きい汽船ではありません。それも、師匠が大法難にあわれ、弟子たちは牢へ入れられたり、所領を奪われたり、世間から見放されている最中にも、日蓮大聖人をお慕い申し上げて御供養にあがるという、これはほんとうに尊い信心だと、私は思うのです。

それからみれば、今の私たちの境遇はひじょうに楽なものです。これは幸福といいますか、また一面では不幸といいますか。一面は幸福のようにみえて、仏道修行の面からみれば、不幸なことです。しかし、実際問題として、朝な夕な不幸な人のために折伏をし、広宣流布に邁進していることは、こ

の富木常忍の振る舞いにまさるとも劣らないと、私は思います。

また、御供養については、あくまでも本部として、総本山にきちんと御供養申し上げておりますから、全学会員が総本山に御供養していることに通ずるのです。

このあいだも、大坊の落成式が厳粛にとどこおりなく終わりました。それと引き続いて、このあいだの幹部会でお話ししました総坊や六壺、厨坊とぜんぶ設計にはいっております。また、墓地にしても、土地にしても、そうとうの御供養もしております。さらに、私は大客殿建立のときの御供養をはるかに越える御供養の決意もしております。

法門の事先度四条三郎左衛門尉殿に書持せしむ其の書能く能く御覧有る可し

これは、指導の方式を述べられているのです。

法門のことは、あなたの同志である四条金吾殿に、きちんと書いて渡しておいたから、「能く能く御覧有る可し」――よくその御書を、お手紙を、指導を、読みなさいとおおせです。

「私は日蓮大聖人から直接聞かなければ、承知しない」というような、身勝手ないき方ではいけないのです。

「あなたの同志にいっておいたから、それを聞きなさい」と。

したがって、現代において、このように、私どもが、日蓮大聖人の御書をみなで拝していることも、同じ原理です。

また、日常的な指導については、大勢なのですから、先輩のいうことを聞いてください、聖教新聞をよく読んでください、大白蓮華をよく読んでください。しかし、根本はなんといっても御書を読みあっていこうではないか、このいき方が、いちばん大事になってくるわけなのです。

それから「依法不依人」ということが大事です。「法に依って人に依らざれ」ということです。あくまでも「四条金吾殿に渡した手紙をあなたもよく読みなさいよ」と富木常忍におおせなのです。

粗経文を勘え見るに日蓮法華経の行者為る事疑無きか

これは日蓮大聖人が、法華経の文上においては、上行菩薩、文底においては、末法の御本仏であるという依文です。

「粗経文を勘え見るに」――法華経の経文に照らしてみれば、その上行菩薩の振る舞いというものは、自分自身の振る舞いと一致しているではないか。

「日蓮法華経の行者為る事疑無きか」――日蓮大聖人が御本仏であられることは、疑いのないことで

ある。法華経の行者とあったならば、これは「末法の御本仏」と拝すべきなのです。

なぜかならば、御義口伝にいわく「本尊とは法華経の行者の一身の当体なり」（御書全集七六〇ページ）と。

すなわち、法華経の行者の一身の当体が本尊です。本尊とは根本尊敬です。したがって、日蓮大聖人が、御本尊であり、人本尊です。人本尊であるならば、仏さまでしょう。

それであるのに、日蓮大菩薩と悪しく敬ったり、日蓮大聖人の教えは南無妙法蓮華経の法華経であるにもかかわらず、釈迦如来に対して題目を唱えさせるというような宗派は、まったく道理に合わないことは、この一事をみてもわかります。

> 但し今に天の加護を蒙らざるは一には諸天善神此の悪国を去る故か、二には善神法味を味わざる故に威光勢力無きか、三には大悪鬼三類の心中に入り梵天帝釈も力及ばざるか等、一一の証文道理追て進せしむ可く候

日蓮大聖人は仏さまであるのに、今、佐渡の国へ流されるというような法難にあったということは「天の加護」がなかったのかというのです。どうして、日蓮大聖人が、そういう大法難にあうかという理由を三つ、つぎにあげられております。

「一には諸天善神此の悪国を去る故か」

諸天善神が、悪国、すなわち謗法の国であるがゆえに、その国をすてて天にあがってしまうのです。「立正安国論」にくわしく論述されております。

「正直者の頭に神宿る」ということばがありますが、真実の正直とは、南無妙法蓮華経を唱える人をいうのです。正法を護持する人を正直という。その人に神は宿り、神は守るのです。これは御書にもありますけれども、それは当然でしょう。

国が悪国であるがゆえに、日蓮大聖人を迫害し、法華経をないがしろにしている国であったがゆえに、諸天善神は、仏のまえで「正法を守護する人を守る」と誓いをたてたのですから、この正法を護持していない国から去るのは当然であるというのです。これが一つです。

「二には善神法味を味わざる故に威光勢力無きか」です。

諸天善神は法味を味わうことによって、個人を、一国を守る力を得るのです。食事ができなかったり、月給をもらわなかった場合には、威光勢力もおとろえてしまいます。もし会社が、職員に対して月給をあげなかったら、威光勢力はおとろえて、仕事なんか、だれもしなくなるでしょう。ストライキをやるのはあたりまえです。

と同じように、あくまでも諸天善神は、南無妙法蓮華経の法味を食べて、神としての働きをするのです。これは法華経を拝し、御書を拝すれば、この原理は、はっきりしているのです。ですから、私どもは神を否定してはいないのです。むしろ、もっとも神を大事にし尊敬しているのは、私どもとい

えるでしょう。

神札は、これはだめです。神と神札は違うのです。はやく妙法が流布されて、天照大神や正八幡大菩薩も、そしてすべての諸天善神がぜんぶ来下して、日本国を守っていくようになれば、何千年の歴史にかつてない平和な世の中が到来することは、御書に照らして当然なのです。ですから、どうしても広宣流布をしなくてはならないのです。

七百年前からみれば、諸天善神もそうとう法味を味わっているといえるでしょう。二百何十万世帯の人が、法味をあたえているのですから、なにやかやいいながらも、刻々と日本の国はよくなってきております。

外国をまわってみても、物資が豊富という点では日本の国は世界一です。こんな小さな、それも敗戦国でありながら経済的にここまで立ち上がったのも、やはり、御本尊のお力が厳然とあらわれているのです。日本全体が大きく守られていると、私は確信するのです。

「三には大悪鬼三類の心中に入り梵天帝釈も力及ばざるか」と。

それはそうでしょう。なにしろ、十何万という宗教法人があるなどという国は、日本だけです。どこの国へ行っても、そんなにたくさんの宗教が乱立しているところはありません。

ですから「大悪鬼三類の心中に入り」――大悪鬼が、俗衆、道門、僭聖増上慢の三類の強敵となってあらわれてくるのです。

日本国中がこのような邪宗教の世界です。魔の働きが強いにきまっています。いわんや、日蓮大聖

人の御出現においては、すごい法難があることは当然です。「梵天帝釈も力及ばざるか」――当然、そうです。これは一往の義です。

日蓮大聖人御自身で経文どおりにお振る舞いになって、もう、すべてお見通しになっていらっしゃるのです。なにも恐ろしくはないのです。また、そういう三類の強敵が出現しなければ、法華経の予言どおりにならないからと、たなごころにのせての御行動のように拝するのです。

私たちもまた、事実、これだけの大折伏戦を、日蓮大聖人滅後かつてない大折伏、大法戦をやったのですから、三類の強敵は、紛然とおそいかかってくると覚悟しなくてはなりません。皆さん方も、難があればあるほど喜んで、宿命転換をしていってください。

釈尊の予言、また日蓮大聖人の御書を拝すれば、正法を護持するものには、かならず三類の強敵があると書いてあります。ですから、難があったからといって、これは、どうもやりかたが少し強すぎるからではないか、もっとやわらかに弘めるべきではないか、などと思うことはまちがいなのです。まことに、御書のとおりになっているのです。

日蓮大聖人も、「難来るを以て安楽と意得可きなり」（御書全集七五〇ページ）、また「大悪をこれば大善きたる」（御書全集一三〇〇ページ）と、繰り返しおおせになっております。

御書をしっかりと拝読してごらんなさい。どの御書を拝しても、すべて、難があるぞ、難があるぞと警告され、また「猶多怨嫉」と、如来の滅後にはかならず難がある、とおおせではありませんか。

にもかかわらず、難がでてくると、どうも強すぎるからとか、私は難がないようにうまくやってい

こうとか、人間にはずるい根性があるのです。

ですから、このように、三つの理由によって、自分は佐渡の国へ流されたのであると、富木常忍が疑わないようにおおせになったのです。

「一一の証文道理追て進せしむ可く候」――証文どおり、道理のとおりに、このようになったのである。それゆえ疑う余地はないのです。あくまでも、経文をひかれて説かれているのです。

なにかあったら、皆さん方も、御書をきちんと拝読していきましょう。

今、大御本尊の御威光は、中天の太陽のように輝きわたっています。また、これだけの法華経の信者が団結していけば、どんなことでもできないわけはありません。ですから、お互いに守りあって、勇敢に楽しくやっていきたいと思うのです。

但生涯本より思い切て候今に翻返ること無く其の上又違恨無し諸の悪人は又善知識なり

「但生涯本より思い切て候」とは、日蓮大聖人の御決意です。

どんな難があろうとも、もとより覚悟のうえである。法華経を弘めきって死ぬのだ、富木常忍、あなたもそういう決心をしていきなさい、と日蓮大聖人おんみずからの御決意を、披瀝されている御文であります。一生涯、信心を貫きとおすべきであるという激励でもあると思います。

総じては、日蓮正宗の全信者にたまわった御金言です。われわれへの激励として、受けとめなければならないところです。

「今に翻返ること無く」――どのような難があったからといって、退転などする考えはみじんもないのである。そして「其の上又違恨無し」――恨みもなにもない。ここが大事なところです。

かつて牧口初代会長の時代に法難があったときに、多くの同志は牧口先生、戸田先生を恨んだのです。法難がきたときに「牧口先生にいわれたから信心したのだ、戸田先生にいわれたから信心したのだ。それなのにこんなに難があって……。うちの主人が牢に入ってしまう」と、さんざん恨んだらしいのです。

現在もまれに、そういう場合があります。「創価学会でいわれたから、信心したのだけれども、こんな難がでてしまった。悪口をいわれてやりきれない」という人が、まれにいるのです。まるで創価学会のためにやっているみたいな考えではいけないということです。「違恨無し」です。信心は、ぜんぶ自分自身のためなのです。

いいときは、ああ、よかったよかった、ひとつも学会をほめないで、自分だけいい気になって、悪いことがあれば、なんでも会長が悪い、組織が悪い、支部長が悪いといいたくなるのです。

大事なことがあったときに、その偉さはわかるのです。信心もみえるのです。

「諸の悪人は又善知識なり」

また難があったからといって、諸の悪人はまた善知識である。大きいおことばです。大慈大悲の御

境界のおことばと拝すべきです。

いろいろ悪口雑言され、難があった。そのおかげで題目もあがり、御本尊の偉大さもわかるのです。また自身の成長もある。したがって、悪人といっても、憎むのでなく、むしろ自分を仏にしてくれる人なのだと感謝していかなくてはならない。「ありがたいな」と心のなかで思えればよいのです。それだけ強い信心をするのです。

日蓮大聖人は、一切衆生はぜんぶ自分の子供であるとおおせなのです。悪人であろうが謗法であろうが、結局は、われわれを仏にしてくれる善知識なのです。ですから、軽蔑したり、憎んでいくということはまちがいです。

邪宗邪義はこれはいけません。これは憎むべきです。しかし、知らなくして謗法をおかし、正しい宗教を知らずたぶらかされている人に対しては、あくまでもめざめさせてあげる気持ちが必要です。

「摂受・折伏の二義仏説に依る」

摂受・折伏の二義仏説に依る、敢て私曲に非ず万事霊山浄土を期す、恐恐謹言。

卯月十日　　日蓮花押

土木殿

摂受といい、折伏といい、仏法弘通の方軌には二義あるが、これは釈尊の説である。

「敢て私曲に非ず」――これは我見ではない、かってに、日蓮大聖人が決めた教義ではないのであるというのです。

よく、私たちが折伏、折伏というと、世間では、まるで創価学会が折伏ということを発明してやっているみたいに思っている。そうではありません。三千年前からあるのですから。仏法には、摂受か折伏か、どちらかしかないのです。

「佐渡御書」に「摂受・折伏時によるべし」（御書全集九五七ページ）とあります。今の時代は折伏です。

末法においては、はっきり折伏となっているのです。それは釈尊の経文にも明確です。いわんや、七百年前に日蓮大聖人が御出現になって、みずから折伏を行じられた。それは御書を拝すれば厳然たるものです。

「万事霊山浄土を期す」というのは「霊鷲山会（りょうじゅせんえ）において、また会おう」と。現在においては「大御本尊を根幹として、人生を生ききっていこう」ということなのです。「霊山浄土」といえば、御本尊のことです。現実においては大御本尊が霊鷲山です。御本尊にいっさいをまかせ、日蓮大聖人にいっさいをまかせて、人生を生ききっていこうとのおことばと拝せます。

（昭和三十七年四月五日）